

吉田常吉先生を偲んで

本年―一九九三年―三月十九日、本学教授を勤められた吉田常吉先生が、八十三歳で永眠なされました。

吉田先生は、一九一〇年、東京四谷に生まれ、国学院大学国史学科から、文部省維新史料編纂事務局―東京大学史料編纂所を経て、一九七五年より本学大学院・文学部教授に就任なされ、大学院日本史学専攻主任等を歴任、一九八七年三月まで教鞭を執られました。

十八年前、先生とはじめて御会いしたとき、失礼ながら御齡より若いイメージを懐いたことを今でも思い出します。そしてそれは、日々御会いする内、先生のもつ若々しい精神と学究にとりくむ厳しい姿勢にあることに気付き、良き師を得た思いがいたしました。先生の講義は、「学生の解読力を養うため、原本を複写してテキストとし」と言う方針で、彦根藩『井伊家史料』の「公用深秘録」、幕末期御徒士の手記など未刊行の史料講読を中心に、その時代背景などを詳細に説明され、さらに、「実証史学」を信条に、「歴史を知るには、やはりその風土に接すること」と言う研究姿勢から、史料編纂所時代の史料調査や豊富な経験を通して得られた成果などをお話し下さり、興味深く示唆に富んだ内容でした。

先生の御人柄は、粹で御洒落。またユーモアやウィットを交じえた洒脱なお話しは、先生のもつ「人間味」がよく伝わり、多くの学生から親しまれていました。御酒も強く新宿のバーなどで深更まで飲むことなどもあり、ウイスキーを傾けながら、熱っぽく語られた御姿は今も忘れられません。

先生が亡くなられ早くも八カ月がすぎてしまいましたが、御葬儀に際して、先生を偲び、大学院や幕末維新史研究会の卒業生など、九州・広島・新潟など遠方からもかけつけてき、今更ながら先生の御人柄を確信させられた思いがしました。唯々、先生の急逝は残念です。

先生は、長年課題とされてきた『安政の大獄』を脱稿された後も、東久世家文書の解読など多くの研究に着手されており、今年正月に御会いした際も、研究への意欲を語られておりました。

吉田先生を偲び、教えを受けた一人として、先生の御恩に対して、その万分の一も応えられなかった思いがしています。

今後、私共教え子は、先生から学んだ学究にとりくむ姿勢や御人柄を忘れず、少しでも多く社会に貢献していくことを心懸け、有意義な人生を送るよう努力することで御恩に応えていきたいと思っています。

(岩崎孝和)